HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	読み書きの困難を抱えつつ学びを求める子どもたち ：「読み書きに悩んでいる子どもたち -読み書き困難における問題の所在と支援-」シンポジウムを終えて
Author(s)	室橋, 春光
Citation	子ども発達臨床研究, 6, 137-138
Issue Date	2014-12-05
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.6.137
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57587
Type	departmental bulletin paper
File Information	AA12203623_06_137-138.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

総括コメント論文

読み書きの困難を抱えつつ学びを求める子どもたち

――「読み書きに悩んでいる子どもたち ―― 読み書き困難における問題の所在と支援 ――」シンポジウムを終えて

室　橋　春　光*

Children with difficulties for reading and writing still claim learning for themselves:

On the finishing the symposium of “Children who have troubles with reading and writing: for the support and the cause of the difficulties for reading and writing”

Harumitsu MUROHASHI

品川論文にあるように、ディスレクシアという特性のある子どもや大人は、周囲の人々が予想もしない「生きづらさ」を抱えて日常を過ごしている。そのような人たちの一部は、スピルバーグ監督のように何かを見出し周囲に支えられて、自ら歩み出す力を身に付けていく。しかしそのような人は少ないのであろう。多くの人たちが、読み書きの困難の故に人間としての価値を切り下げられ、その困難の外に持つ特性を活かすことができないまま、彼らの人生を終えることになる。

ディスレクシアという特性のある子どもが、彼らの人生を歩む力を身に付けていくために、教育の果たすべき役割はとても大きい。通級指導教室における指導や中学での英語の指導などが適切に行われていけば、彼らの持つ「生きづらさ」は薄められていくと期待し得る。しかしそのためには、彼らの持つニーズに合わせた取り組みが必要なのであり、そのためには彼らと「共同戦線」を組むことが求められるのである。

山下論文からは、読み書き困難を抱える子どもたちが「勉強」への意欲を失いつつも、学ぶことへの欲求をかろうじて保っている姿がみえてくる。子どもの学びへの意欲を引き出すためには、その子どもをよく観察することが必要であり適切なアセスメントも重要であることがうかがわれる。教師のもつ指導スキルは、子どもの実態とマッチして初めて効果を持ち得るのである。そして、指導に応じて子どもの内部にどのような変化が起きているのかを予想し、その予想＝モデルを修正しながら子どもの実態に迫ることが望まれるのである。山下論文における実践には、子どもと「共同戦線」を張りながら子どもの実態に触れようとする姿勢が現れており、教育実践の方向を考える報告として興味深い。

奥村論文は、英語の読み書き困難のある子どもへの支援に関するものである。日本語の読み書きに困難のある生徒にとっては、中学であらたに英語を「勉強」することは、ようやく慣れ始めたことばの学びにさらに困難をつきつけるものとなりがちである。日本語と英語の言語的諸構造の違い

*北海道大学教育学研究院

を踏まえたうえで、時間をかけてその子どもにあった指導を積み重ねていけば、読み書き困難のある生徒であっても、少しずつ英語への学びが深まっていくことがうかがわれる。それは、他の子どもたちよりもかなり時間がかかるかもしれないが、子どもが高等教育に進んだときに学びのだいじな基盤になっていく可能性は決して小さくない。現に私たちが関わった事例の中に、読み書き困難の故に苦手だった英語が高等教育では得意科目になったという人もいる。その子どもにあった学びの姿を、社会が積極的に認めていくことこそ必要なのである。奥村さんは基礎的研究として、脳が極めて短時間のうちに、文字刺激を視覚的／音韻的に処理していく過程を調べているが、そのことが適確な臨床的実践を作り出すことにつながっているといえる。小学校において英語の導入が始まっているが、読み書き困難を抱える子どもたちとともに導入に取り組む姿勢が重要となろう。

小泉論文は、いわゆるギフティッドと呼ばれる特性をもつ子どもたちとの関わりについての報告である。欧米諸国では、キリスト教文化を背景として「天賦の才」を積極的に育てることを認める。しかし近年、「天賦の才」を有する子どもたちが、必ずしも「恵まれている」わけではないことが示されるようになってきた。それは、彼らの認知機能に強いアンバランスが見出されることが少なくないからである（Vaivre-Douret, 2011; Budding, D., and Chidekel, D., 2012）。アメリカにおいては近年、彼らに 2E:twice exceptional、すなわち平均外の認知能力を有する部分と、発達障害的特性を有する部分があるという認識が生まれるようになってきた。彼らはそのような意味で二重に疎外されており、特別な教育的ニーズを有するとみなされている（中村・水内，2010）。小泉論文では、その認知的アンバランスを WISC という知的機能を測定する検査をツールとして検討し、また事例検討の中で自らかかわってきた生徒の生きづらさについて考察を加えている。

近年、日本における少子化への対応が論じられている。知的機能の高低と結びつくような教育的価値観から離れ、その子どもの抱える困難の外にある特性を活かすような教育システムを構築し、一人ひとりの子どもを活かすことが、日本の将来にとって重要なのではないだろうか。

聞く・話すという機能と異なり、読み・書きに対応する脳の機能は、生物の進化からみれば、ヒトにおける必須の装備なのではなく、関連機能のリサイクル的利用に基づくと考えられる（Wolf, 2007; Dehaene and Cohen, 2007；室橋，2012）。読み書き能力の習得は、日本においては明治期以降、学びの基礎として義務教育の中で必須のものとされるようになった。しかし、読み書きに適した脳をもつ子どももいれば、そうでない子どももいるのである。読み書きの習得を義務教育の基礎的柱とするのであれば、一人ひとりの子どもの脳機能に見合った指導を実践することが大人の義務であるといえよう。現場においてそのような実践が可能となる義務教育システムが整備される必要がある。

文　献

Budding, D. and Chidekel, D. 2012 ADHD and giftedness: A neurocognitive consideration of twice exceptionalty. Applied Neuropsychology: Child, 1, 145–151.

Dehaene, S. and Cohen, L. 2007 The unique role of the visual word form area in reading Trends in cognitive sciences, 15(6), 254–262

中村順子・水内豊和　2010　日本における GT 教育の可能性　富山大学人間発達科学部紀要，5(1)，161–168.

室橋春光　2013　発達障害と認知：読み書きの困難（根ヶ山光一，仲　真紀子(編)「発達の基盤：身体，認知，情動」第 19 章）242–254. 新曜社

Vaivre-Douret, L. 2011 Developmental and cognitive characteristics of “high-level potentialities” (highly gifted) children. International Journal of Pediatrics, doi: 10.1155/2011/420297.

Wolf, M. 2007 Proust and the squid -The story and science of the reading brain. Harper Collins Pub.プルーストとイカ―読書は脳をどのように変えるのか？小松淳子訳　インターシフト